

戸隠神社(杉並木関連)歴史年表

戸隠歴史	年号	顕光寺別当	倒木年輪	西暦	時代	年号	日本の植林、森林保護の歴史
<p>参考 『戸隠総合学術調査』1971年信濃毎日新聞社 『戸隠信仰の歴史』1997年戸隠神社 『戸隠顕光寺年表〔古代・中世〕』1999年牛山良幸</p> <p>この頃、飯縄山の修行者「学問」が、鬼を岩屋に封じ込めて戸隠寺を開くと伝える〔阿婆縛抄〕。</p>	嘉祥 2年 (849)			850 855 860 865 870		貞観 8年(866)	<p>参考 『日本林業経済史論1』専修大学社会科学年報第41号(2007)西川善介</p> <p>『日本の松原物語』2009年(財)日本緑化センター 『加賀藩政期の森林保護』環境システム研究 Vol. 25巻 1997年 安達 貢</p> <p>常陸国鹿島神宮造営の材料とすべきスギ(4万株)、クリ(5700株)を近傍空閑の地に植え、造宮備林とする。(まとまった林木植栽の記録としては最古)『日本三大実録』</p>
能因歌枕に戸隠の名が所見。	長元 1年(1038)			1030 1035 1040 1045 1050			
宝光院(福岡院)が成立したと伝える『顕光寺流記』	康平 1年(1058)			1055 1060 1065 1070 1075			
戸隠の僧積長名、火定をなすと伝える。『拾遺往生伝』中院(富岡院)が成立したと伝える『顕光寺流記』	1081~1084年 寛治 1年(1087)	11・如範		1080 1085 1090			
第十一代別当如範の在職中(治山三十七年)三間四間の茅葺き本院講堂できる。『顕光寺流記』この頃火乃御子社勧請させる別当静実(井上満実の子)が白河上皇を呪詛したかどで土佐国に配流される『百練抄』	承德 2年(1098) 天永 1年(1110)	12・善勝 13・静実 14・寛範		1095 1100 1105 1110 1115 1120 1125 1130 1135 1140 1145			
別当寛範権別当湛助、灯明高乗房他二十一房の大家の合力によ銅仏器九枚が舞納される『顕光寺流記』	久寿 1年(1154)	24・寛範		1150 1155 1160 1165 1170			
栗田寺別当大法師範覚、村上義直らと水曾義仲に従い、平家の方入笠原平五頼直を市原(村カ)に破る『吾妻鏡』		25・寛覚(栗田)		1175 1180 1185			
※この範覚は第二十五代寛覚の誤記、もしくは二十四代寛範と二十五代寛覚の合名と考えられる。		26・寛明		1185 1190 1195			
別当澄海が九頭龍宝前に銀鏡一面等を奉納『顕光寺流記』	建暦 3年(1213)	27・栄真(井上) 28・井上某		1200 1205 1210			
本院仁王門の造立『顕光寺流記』井上大衆と合戦す。『顕光寺流記』	貞応 3年(1223)	29・済海(井上)		1215 1220 1225 1230 1235			
第三十代別当の寛明が死去する。この別当の任中に三院大衆が離山して中条に居住するという『顕光寺流記』	建長 3年(1251)	30・寛明(栗田) 31・寛賀		1240 1245 1250 1255 1260 1265	鎌倉時代	寛元 2年(1244)	道元、傘松峰大佛寺(1246年に山号寺号を吉祥山永平寺と改名)を建立 (永平寺開創)
宝光院大衆が山を離れ、霊山寺に住むという『顕光寺流記』	文永 7年(1270)	32・寛暹		1270 1275 1280 1285 1290		(正安年間)	信濃の人発地(発智)太郎が武蔵国高麗郡に移り山地を開墾して植林に努める。
上野三郎入道の子息弥三郎入道の子供が寺中で猿狩をしたため、三院の神輿が火御子社に振り出す。第三十三代別当寛清の任中『顕光寺流記』本院御祭所雪崩でつぶれる。	永仁 4年(1296) 永仁 7年(1299)	33・寛清		1295 1300 1305 1310 1315			
第三十三代別当寛清が66才で死去『顕光寺流記』	嘉暦 1年(1326)	34・寛毫 35・寛城		1320 1325 1330 1335 1340 1345 1350 1355	建武の新政		
稚児の塔造立(塔銘)	応永 6年(1399)	36・寛崇 37・寛秀		1360 1365 1370 1375 1380 1385 1390 1395 1400	南北朝時代	(応永年間)	京都北山において、初めてスギの台木をつくる。(白杉、北山丸太栽培の起源)
十穀聖有通が諸本を校合して『戸隠山顕光寺流記并序』を編纂し、本院御祭所に奉納する。筆者は法林坊定与。	長禄 2年(1458)	38・寛用 39・寛栄 40・寛空 41・寛城		1405 1410 1415 1420 1425 1430 1435 1440 1445 1450 1455 1460 1465 1470 1475 1480 1485	室町時代	(文明~長享年間)	犬居町秋葉神社社有林にスギ、ヒノキが植林されると伝わる。(天竜での人工造林の開始)

			1490		
			1495		
		42・宣秀	1500		文亀 1年(1501) 奈良県吉野川上郡でスギの植林が始まる。(吉野での人工造林の開始)
			1505		
			1510		
			1515		
天台道士の魁であった東光坊宣澄が真言道師に殺害されたと伝える。第四十二代別当宣秀の任中という『戸隠山神領記』	大永 4年(1524)		1520	戦国時代	
			1525		
宣澄が殺害された後、台密修験の奥義を相承するものがいなくなったため、宣秀と弟子の栄快らが豊前国彦山で修行		43・栄快	1530		
			1535		天文11年(1542) 武田信玄、この年大氾濫した甲斐国釜無川の左岸に霞堤を築き、水防林として樺、竹などを植林する。
			1540		
			1545		
第一次川中島合戦で武田信玄が戸隠参詣路絵図面を要求。武田と上杉の合戦で、大衆は三越三国頸城郡石山(関山か)に逃れ、6月26日に帰山するという『戸隠神領記』『戸隠大権現縁起』。	天文22年(1553) 弘治 3年(1557)	44・永秀	1550		
奥院の祇乗坊真祐らは謙信の再侵略を恐れて、新客七十余人を率いて、武田方の大日方氏領小川郷代カ鋒に移る『戸隠大権現縁起』	永禄 7年(1564)		1555		
			1560		永禄 8年(1565) 上野国新田郡長楽寺「杉苗をフセサス？」の記事「長楽寺永禄日記」
			1565		
			1570		
			1575		天正 1年(1573) 武蔵国高麗郡、稚苗数万本を植え、かつ数十町歩の原野を新開して木を増殖する。(1573~1591) 駿河国浮島原に聚落のための防風林(風害防備林)
			1580	安土桃山時代	
		45・賢栄	1585		
			1590		
別当賢栄、上杉景勝の支援を得て社殿を再建。筏ヶ峰の衆徒帰山	文禄 3年(1594)		1595		
栗田寛祐、二百石で火乃御子社に奉仕する	慶長 3年(1598)		1600		慶長 4年(1599) 薩摩藩主島津義弘が朝鮮出兵からの無事帰国に感謝し狭野神社参道に杉を挿し木奉納する
松城城主松平忠輝、大久保長安を通じ戸隠権現に神領二百石を寄進	慶長 9年(1604)	46・永尊	1605		慶長 5年(1600) 仙台藩主伊達正宗の命で和田因幡守が遠州浜松からクロマツの種子を取寄せ、潮除須賀松林を造成
			1610		元和 4年(1618) 松平正綱が幕府の命で箱根宿を設けたとき、杉並木植林したと伝わる。
徳川家康、戸隠神領1000石を寄進	慶長17年(1611)	47・桂海	1615		元和 5年(1619) 紀州に移封された徳川頼宣が尾鷲地方の人工造林の端緒を開く。(尾鷲林業)
飯島因幡守、三社を造営	慶長20年(1614)		1620		
桂海、俊海、宗海は越後の五智、愛宕、蔵王、関山の別当を兼務する。		48・俊海	1625		寛永 2年(1625) 松平正綱が東照宮への参道に杉の植樹を開始。24年をかけて現在の日光杉並木の様相を整えた
			1630		
			1635		寛永13年(1636) 紀州藩が奥熊野山林定書を公布。
松本藩主水野忠清の寄進により奥院参道を修理する。	寛永20年(1643)		1640		寛永19年(1642) 寛永の大飢饉
			1645		慶安 1年(1648) 弘前城下に防風の杉を植栽
			1650		
			1655		寛文年間 幕府、諸藩は林産資源保続のため御林(おはやし)を設ける。
本院再建	天和 3年(1663)	49・宗海	1660		寛文 6年(1666) 幕府は下流域の治水を目的に上流域の森林開発を制限する『諸国山川掟』を発する
			1665		
			1670		
			1675		天和 2年(1682) 弘前藩は樹芸方に命じ、貞享 2年(1685)までに松杉3万本を植栽
			1680		
			1685		1700年より前 この頃千葉山武地域の挿し木造林が始まると言われる。(山武林業)
			1690		元禄 9年(1696) 山住家23代大膳亮茂辰が伊勢から杉苗3万本を購入し植栽『大膳亮日記』(天竜林業 山住杉)
			1695		元禄10年(1697) 仙台藩、陸前国気仙郡の百姓半兵衛に熊野スギの実をわたり65万坪にスギを植林させる。
			1700		元禄15年(1702) 弘前藩主津軽信政、外浜の明山へスギ苗4万本植え付ける。
三所権現江戸出開帳	元禄13年(1700)	51・見雄	1705		
		52・子義	1710		
		53・公栄	1715		享保 1年(1716) 九州日田地方にスギの山挿し始まる。
中社大工中川奎右衛門、惣次郎古宮神社本殿建造	正徳 5年(1715)		1720		享保 4年(1719) 萩藩、20年毎に伐採する輪伐法を取り入れた「番組山」制度を導入。
中院修造	享保 4年(1719)	54・宣清	1725		
宝光院修造	享保 8年(1723)		1730		
			1735		
別当乗因、戸隠山に灌頂を復興。戸隠大権現縁起を著す。	天文 1年(1736)	55・乗因	1740		
		56・周順	1745		
		58・慧含	1750		
			1755		
三所権現の江戸出開帳	宝暦 5年(1755)		1760		
中院・宝光院修造 大頭庵建造(宝暦年間)	宝暦 8年(1758)	58・慧順	1765		明和 1年(1764) 石谷備後守から天竜沿岸24か村に、御林並びに百姓持山にスギ・ヒノキの挿し木が申し渡される。挿しスギ、挿しヒノキ造林についての具体的な仕法の通達。(幕府による造林技術指導の始まり)
九頭龍社再建	宝暦 9年(1759)		1770		
本院再建	明和 5年(1768)	59・知遠	1775		
59代別当知遠「前原栗林」を三院の御堂建立の用材林と定める。	安永 3年(1774)		1780		
			1785		
横曳き事件 宝光院衆徒十七坊退院	安永 9年(1780)	60・普達	1790		
宝光院空坊の内十二坊中院より転院、中院十二坊、宝光院五坊は空坊となる	天明 1年(1781)		1795		
宝光院修造 天明8年中院修造	天明 6年(1786)		1800		
	寛政 1年(1789)		1805		
九頭龍堂改築	寛政 4年(1793)		1810		
	享和 1年(1801)	61・堯瓊	1815		
			1820		
戸隠九頭龍権現江戸出開帳。奥院「玉橋」より上に道路を通す	文化 8年(1811)		1825		文政 7年(1824) 日向国飫肥藩、スギ苗102万5000本を植林する。
61代別当堯瓊3院に杉苗100本づつを割りあて宮付近、自坊内に植えさす。	文化13年(1816)		1830		文政 9年(1826) 鳥取藩、「諸木増殖仕法」を制定。苗木を支給し、地主と植林者の分収形態を認める。
山崩れにて中社社殿こわれ神像を仮殿に移す。	文政 3年(1820)	62・堯威	1835		
			1840		
			1845		
善光寺大地震	弘化 4年(1847)	63・慈縁	1850		
中院社殿修復改造 奥社再建	嘉永 3年(1850)	64・慈伝	1855		
大坊破損につき大改造を行う	安政 6年(1859)		1860		
宝光院本殿再建	文久 1年(1861)	65・慈谿	1865		
中院大門通り拡幅整備、各院桜を3本植える。常夜灯設置。	1853~1871		1870		
神仏分離政策により奥社12坊は里坊に転居。戸隠神社発足。	明治 1年(1868)		1875		
奥社雪崩崩壊	明治 2年(1869)		1880		
奥社社殿再建	明治 8年(1875)		1885		
			1890		
			1895		
			1900		
			1905		
			1910		
			1915		
			1920		
奥社講堂の礎石群を発見	昭和 2年(1927)		1925		
			1930		
九頭龍社社殿表層雪崩で崩壊	昭和11年(1936)		1935		
			1940		
中社社殿全焼	昭和17年(1942)		1945		
供木運動始まるが奥社杉並木は規格外で免除となる。	昭和18年(1943)		1950		
火乃御子社杉並木伐採			1955		昭和26年(1951) 旧(第2次)森林法(1907年)を全面改正して第3次森林法が成立(一部改定されつつ現行法となる)
中社社殿再建 奥社社叢の杉が使われる	昭和31年(1956)		1960		昭和35年(1960) 治山治水緊急措置法にもとづく長期計画を策定
伊勢湾台風により奥社参道の杉が7本倒れる	昭和34年(1959)		1965		
雪崩のため奥社社殿・休憩所が全壊	昭和37年(1962)		1970		
			1975		昭和39年(1964) 森林・林業基本法を制定
S38年信毎戸隠総合学術調査始まる。奥社本殿(木造)と社務所が再建	昭和39年(1964)		1980		
			1985		
奥社本殿、休憩所が雪崩で崩壊、流出する。	昭和53年(1978)		1990		
奥社本殿再建	昭和54年(1979)		1995		
			2000		
			2005		
			2010		

植林期?

植林期?

1816年の植林期

伊勢湾台風(1959)風倒木年輪

奥社杉並木の初期植林と推定される期間

明治時代

大正時代

昭和時代

平成